

鈴木鎮一著「備—教—育」Suzuki Method 才能教育 2009年秋 2009年9月17日発行を読む

備—教—育

1. 子供にマリを投げる場合に

「さあ投げるよ」

と言うと、こちらを向いて、受けとる心の準備をする。

そこで、私どもは、この子供はどの位の強さのマリの投げ方をしたら、うまく受けられるかを知っている

「ゆくよ！」

と気合を合わせながら、受けられるようにひょいと相手の能力に応じてマリを投げて、受けとる喜びを投げかけるのである。

2. このように、受けとれる喜びを投げかけながら、だんだんにマリの速度を変化させ、能力に応じて、カーブまで発展させて育ててゆくわけである。

この日常私どもがやっていることと同じ原理が、教育の場合にも、そのまま行われなければならないと思う。

教育、つまり教え育てるということについても、

「さあ投げるよ」

と言って、こちらを向かせること。すなわち、受けとろうとする心をつくる準備が必要であり、

「ゆくよ！」

という気合が必要であり、受けとれる喜びを投げるうまさが必要であろう。

3. 才能教育の会員は、この要領をヴァイオリンの学習の上に活用していただきたいものである。

「さあ投げるよ」

とも言わないで、いきなりマリを投げつけ、子供の顔にマリが当たって泣かせたり、相手の能力を思わず、強い球を投げつけて鼻の先へマリをぶつけて、すっかりおびえさせ、受けとれる喜びを与えるうまさを行わず、鼻にぶつけられる恐れを受けとらせたりしないように願いたいものである。

4. 「教えることが教育だ」と考えている今日の一般常識は、本当に困りものである。

「受けとれるための準備」

これが、はなはだ主要なものだということを私は思うのである。

「受け方を教える」ということが教育の「教」にあたるが、こんなことは教育技術上の手続だけのことである。

「どんな球でも受けとれる能力」をつくることが重要なことであるのに、今日の「教える」ことをもって教育とする一般常識では、そのような能力へは、なかなか育てられていないのである。

実能力をつくるには、教えるという知識の世界だけではなく、教育の「育」という最終の目的で

ある所のものが一番大切なものであろう。

5．以上のことを考えて、私は、会員の皆様にヴァイオリン学習の上においても

一、備

二、教

三、育

の三拍子揃ったやり方を是非ともお願いしたいのである。

しかも、「育」が目的なのである。

[コメント]

この通り。何も言うことなし。鈴木鎮一先生の教えはすべて正しい。そう思う。

- 2009年10月3日 林明夫記 -